

# 日本生物學會誌

第 15 卷



日本生物學會

1983年 4月25日

第 15 号 も く じ

松本 郁夫	： 生態学者の精神分析 .....	505
細見 彬文	： 西アフリカ、ダカール大学訪問記 .....	516
半仙 半魚	： 偏見と独断 (8) .....	525
栗間 修平	： 「地震・憲兵・火事・巡査」 (書評とおほしきもの) .....	530
田中 敏之	： 課題研究発表会の事後報告として .....	536
生物学辞大事典	： 「とり」 .....	537
会計報告	(会計監査付) .....	538
編集局	だより .....	539

## 生態学者の実存分析

松本 郁夫

### << 起 >>

ある人が恋愛をしたとしよう。そしてその全過程が出合いに満ちたもの（他者との、他者を通した自己との）であり、その出合いへの喜びと苦悩とに満ちたものであったなら、たとえその恋愛が別離に終わっても（失恋、死別、生き別れ）その恋愛を空しいもの、無駄なものとは思わないであろう。哀しいにはちがいないにしても。

しかし、これとは全く異質な恋愛、たとえば結婚することだけを目的にした恋愛（と呼べるかどうかは別として）の場合、当事者はその目的のために全過程を犠牲にする。相手にきらわれることがないように、一瞬も気をゆるめずに経過する時間の蓄積。そしてそのあけくに失恋したとき、いったい何のためにあれだけの時間をつぎこんだのかとむなしく感じるにちがいない。全過程が、結果としてのみ得られるはずだった目的（＝結婚）によって支えられていたのだから、目的が無になるとき過程はその存在価値を失なって空しさだけがのこる。

そして、もし仮りにたとえ後者の恋愛が実を結んだとしても、その空しさは依然として消えることなくあるのではないだろうか。ただ、本人がそれに気付くことがなくとも、前者の恋愛と比べると、感動（喜びであれ苦悩であれ）のうすい均一な時間の空虚さとして。

前者が、失敗してもなおかつ豊かな恋愛であったとすれば、後者は成功してもなおかつ貧しい恋愛である。

もっとも、これはかなり単純化した話ではあろう。およそ人間の行為である以上、妥算のない恋愛も妥算しかない恋愛も例外的にしか存在しない。ただ、成功するか失敗するかが問題になればなるほど、行為そのものは貧困化する。充足した行為ならば、結果がどうであれそれなりに味わいがある。世の成功者がどれほどの空虚さを内にかかえているかは、彼が何かにつまづいたときいきいきと露わになる。順風満帆に表街道をつき進む者は、己れの空虚さに目をやる機会を得られぬまま、それを蓄積し続ける。

恋愛を結婚の手段としてしかとらえられない人間は、貧しい恋愛しか選べない貧しい生を生きてきたにちがいない。そしてその結婚生活も貧しいものにするだろう。（夫の出世、マイホ

ーム、子供の進学、安定した老後 — 目的としての）本人はそれと気づくことなしに、同じ選択をくり返し続けているのである。ただそのパリエイションとしての成功か失敗かのみ目をうばわれて。

ざ折こそが、成功におおわれていた空虚さをとらえ返す唯一のチャンスであり、その空虚さをもたらした選択を痛切に意識することによってのみ、選択を変えることが可能となる。

#### << 承 >>

本誌13号で「生態学者の精神分析」と題して、日本の生態学のリーダー伊藤嘉昭氏の分析を行なった。そこでの論点を要約すると、伊藤氏の基本的な態度として、①自尊心の肥大（自分がいかにいそがしいかを長々とうったえる）、②表面的、俗物的な価値判断（論文の数、学位、外国留学の有無、等々）、③自己献身の押し売り（民衆の求める生態学の水準上昇を夢中で追求！）、の3点を、そして彼の強く求めている「生態学的发展」なるものが、生態学者集団の地位向上と彼らの価値体系の絶対化に他ならないことを指摘した。

ここに典型的な実例として、近代合理主義者の自己疎外の状況を見ることができるよう思うので、さらに深く分析を進めてみたい。

ごく大ざっぱに言って、個人のレベルでの近代化とは、身分や因習から解放されて自由を得ることであった。しかし、あらゆる選択の主体として自己を意識することは、不安を意識することでもある。自由と不安とは切りはなすことができない。そこで、この重すぎる荷物（すべての価値の基準が自分にあること）をもてあまし、既成の価値体系に自らを埋没させることで不安から目をそらすのが、いわゆる俗物の生き方である。三木清は、努力型の成功主義者を俗物中の俗物とみなしている。他の種類の俗物は、気紛れに俗物であることを止めるが、この俗物は決して軌道はずすことがない故にそれだけ俗物として完全であるというのである。もう一度、前回の論文で引用した伊藤氏の文章を読みかえしてみたい。

次いで、社会のレベルでは、近代化によって人間とおしの直接なつながりをもった共同体は解体され、資本の論理によって間接的に媒介された個人の群れがもたらされた。経済学が成立するためには、同じ量と質のパンであれば必ず安い方の店で買うような人間ばかりでなければならない。買ってくれる人の満足感をありありと想像したり、作ってくれた人の苦勞に感謝したりすることで、生産と消費のよるこびをそれぞれに倍加するようなつながりは、消滅してしまわざるをえない。

その帰結は、少なくとも2つある。第一に、切りはなされた絶対者として自己をとらえることである。他人とは、あらゆる意味で自己に利益をもたらすものにしか過ぎない。金と地位と名声につながる限りにおいて意味をもつ人間関係。すべての価値を蓄積する場としての自己は、絶対者として孤立し、宙に浮いたような不安を体験する。そこで再び自己を強力に位置づけて安定

感を与えてくれる集団を求めるようになる。

伊藤氏にとっての生態学界とは、このような集団として意味をもつものであるようだ。その集団への帰属を確認するために、念入りな仕事ぶりの披露、そして自らの属する集団が他の同類集団に見劣りすることに対するあせり。

ただし、このような集団内にあっても、各個人はそれぞれに自尊心にあふれた絶対者であることにはかわりはない。エゴとエゴのぶつかりあう相克の惨状を他人に対しても自分に対してもごまかすために、集団への自己献身が美德とされる。(およそ、管理者が自分に都合のよいことをおしつける時には、相手のためにといったふうを装うものだが、この態度は自分の良心をも満足させる点で、二重のギマンである。)

直接的な人間とのつながりを失なったことの第2の帰結として、行為の貧困化がある。倍加する生産や消費のよろこびはもとより、生産そのもの消費そのものよろこびすら、結果としての金や地位や名声のために蚕食されて、空どう化した単純作業と所有のみがのこる。(ひたすら金と出世のための労働、みえと気ばらしのための浪費。)

この世に生きてゆくならば、程度の差はあれだれしもが意にそわぬこともやって金とか地位とかを得ようとせざるをえぬだろう。ただ、自己のさまざまな欲求が行為において充足されるほど、結果への執着はうすれていくにちがいない。金や地位への執着がはげしいほどに、そうならざるをえない行為の空虚さ、生き方の貧しさが透視される。

再び伊藤氏の仕事ぶりと不満を思い出してみよう。彼は、大学教官というポストとその給料と数々の著作のうみ出す名声や印税とを得ているにもかかわらず、なおも空虚さをおおうことができない。「生態学の発展」によって仮りにむなしさからのがれられたとしても、彼の生をつらぬく貧困は消えることなくありつづける。

もしも、自分の気に入った仕事だけをていねいに仕上げることで、創造性の実現や好奇心の満足を得ているならば、研究者としての自由と給料だけで充分すぎるはずである。自己疎外がはげしければはげしいほど、不満をうめむためにより多くの物質と幻想を必要とする。

以上、近代を一方的にけなししてきたが、身分制にがんじがらめにされた人と社会に対しては、近代合理主義が解放の理論でありえたことはたしかである。しかし、身分にとってかわって今度は能力が人間を外からも内からも疎外するようになった。

近代社会の秩序を支える能力とは、次のような内容をふくんでいる。第一に、学歴に代表されるような極めて表面的な尺度によって秩序づけられたもの。第二に、効率や精密さなどといった仕事処理能力。第三に、明朗さやゴマスリのうまさなど。

これらの諸能力に対する重要性の比重は異なっても、あらゆる職場・学校、リクリエーションの場においてさえ、能力が人間を位置づけ差別する。前近代において、身分が個人の適性や野

心を封じ込めたように、近代は個人が行為そのものの内に得るべき充足やよろこびを、能力という刀で切り捨てる。

何も、能力なるものが全く無意味なものであるというわけではない。身分にしばられていてはのりこえられない歴史的要請によって近代がむかえられたならば、良かれ悪しかれこの近代社会の要請に答えうるかぎりでは、能力主義の存在価値がある。ただ問題は、そのかぎりであるべきものが、絶対となることである。一方のベクトルとして、管理する者は、能力主義にはずれた人間や、一応組みこまれたにせよ余暇などにおいて能力主義のおよばぬ生活を有する人間を恐れ、より完璧な管理のために全ての人間の全生活を透明には握しようと努める。他方で管理される側は、自らをより高い能力たらんと欲し、またそうしないとけ落されるような競争にまきこまれてますます全精神を能力主義にさしむける。互いに歩みよりつつ、能力がすべてをおおうようになるのである。

伊藤氏は明らかに、管理する者としてあろうとしている。彼が生態学会のあらゆる研究者にもっと論文を書けとしたり、水をさす反近代主義者を追放せよと叫ぶ理由は、正にここにある。再び三木清の言葉を借りれば — もし人がいくらかの権力をもっているとしたら、成功主義者ほど御しやすいものはない — のである。逆にいえば、餌におびきよせられる者は、しまつに終えない。(餌づけは生態学の常道！)

この思想は、彼を中心とする今日の生態学にもつらぬかれていく。あらゆる生物について、的な生活様式を捨象し、個体数や現存量という抽象化された数量のみをとりあげて、コンピュータを利用して処理すること。あるいは、今流行の社会生物学においては、行動を DNA レベルで説明しつくそうとする。すべては自然を管理するために！ これらの抽象化がそのフクグミの中で、ある程度の効果があることは認める。ただし、それは先ほどの能力主義の場合と同様に、である。

このような管理を目的とした対象のは握が何をもちたらずだろうか？

第一に、抽象化され切り捨てられた部分の反乱である。人間が総体的に生きたいという願いを失なわないかぎり、高度な能力を求められれば求められるほど、人間はせまい部分におしこめられ、さまざまな欲求を封じこめられることへの反発は増大するにちがいない。

自然については、自分から管理されようと思ったりはしないから、より正直、直接に、人間の浅知恵を思い知らせてくれる。

第二に、そのような対象のは握自体がもちたらず、自らの生の貧困化である。自らの利益でしか動かない人間ばかりに囲まれた人生の味気なさは、想像に余りある。釣り糸をたれる前に、魚の釣れる確率何%とわかるより、釣れるかどうかさっぱりわからない方がずっと面白い。もっとも、今の降雨確率ですらあまりあてにならないぐらいだから、そこまで科学が進歩するとは思え

ないが。

このように、本来豊かである世界の諸相をあらゆる面で空疎化しながら、ますますその空間を均質で陳腐な物質と幻想で埋めていく。この作業は、フィードバックの機構を欠いたまま、自己完結的に増殖しつつある。その空虚さをあばきうるのは、いかなるご折によってであろうか。

「ほくの知ってるある星に、赤黒っていう先生がいてね、その先生、花のおいなんか、吸ったこともないし、星をながめたこともない。だあれも愛したことがなくて、していることといたら、零せ算ばかりだ。そして日がな一日、きみみたいに、いそがしい、いそがしい、と口ぐせにいいながら、いばりくさってるんだ。そりゃ、ひとじゃなくて、キノコなんだ。」 サン＝テクジュベリ

「事物を知るとはそのいろいろな相を知ることである。固定した瞬間の特定の相だけを問題とするとき、事物は数えうるものとなる。しかし、そのとき、事物は生命を失い、単なる物質にすぎないものとなる。……………」

「大人たちが数字が好きなのは、すべてのことがわかったうえでそうしているのではなく、ほかのことが何もわからなくすなのである。数字は事物が残したいわば彼のあどかたにすぎないが、彼らは事物そのものとかん違いしている。」 塚崎幹夫

## << 転 >>

さて、ひるがえって身の回りを見わたせば、伊藤嘉昭氏の同類やミニチュアが大勢おり、私自身の内にも彼と同様の精神は容易に発見されうるのである。およそ批判なるものは、自己批判を内に含むものでなければ、本ものではない。

今度は分析のホコ先を身近な集団とその構成員へと向けてみよう。思いつくままに並べると、大学での講座あるいは研究室集団、サークル集団、気のあった友達とおし、恋人とおし、そして家族。ある者はこれらすべての集団に所属して相互に矛盾しあうことなく両立させ、ある者はそのうちの1つ（たとえば研究あるいは恋愛）に没頭し、またある者はこれらすべてから逃げ出して自己のカラにこもったりする。これらの集団へ個人を結びつける力は、家族において最も運命的（子供の立場として）であり、研究室・サークル集団では主に目的の共有として、友達や恋人において最も個人の選択的なものとしてある。

これらの集団の内には、先に述べた前近代的な共同体としての性質と、近代的自我を確立した個人の集合体としての性質の両方をそれぞれに異なった比重で合わせ持っている。

まず研究室集団をとりあげよう。この集団を、近代的な集合体の典型として描写してみる。

まずその形式としては、典型的には教授・助教授・助手・大学院生・学部学生（主に卒業研究にとりくむ4年生）によって構成されている。時には各教官に院生・学生が配分されてサブグループを作ることもある。その実質の近代的側面は、各構成員がそれぞれに自己の利益をうることである。一般に、教官は自分の業績をあげることに、学生は学歴をつけてしかるべき職につくことをめざす。もちろん、ここでは「能力」がものをいう。その内容には、発想の豊かさや語学力、器用さなどだけではなく、上の者に対する従順さ、どんなつまらない仕事もやりぬく忍耐力なども含まれる。（後者の方が重視されることが多い。）教官にとって学生とは無給の労働力にすぎないが、「能力」ある学生を集めて勤勉に働かせるためには、就職口という報酬を適当にチラつかせなくてはならない。これが不十分であると、学生の従順さと研究への熱意が減退する。（もっともある程度の不十分さは、わずかのポストをめざしてますます従順で勤勉になるという効果をもたらすから、適当に不十分な報酬がベストである。）

学生の側は、自らの研究能力をみがき、認められるような論文を仕上げることに、教官への奉仕という応々にして相反する行為に、各自の適性と状況判断にしたがってエネルギーをふりかける。

以上が、近代的自我を確立した個人による近代的な集団の1つとしての、研究者集団のモデルである。ここでは教官と学生の相方が、最小の努力で最大の利益を求める結果、ある妥協点において一応の安定をみる。この妥協点は相方の力関係によって決まるから、たいていは相当に学生にとって不利である。ともあれ、学生は「能力」市場で自らをなるべく高く売りつけるために既成の価値体系にみあうよう自己を成形する。例外的に、学生が自由に研究できる研究室（たいていは教官に就職をあっせんする能力がないからにすぎないが）においても、事態はあまり変わらない。「能力」市場で評価されるためには、最も流行の（あるいは、目先のきく者は、これから流行るにちがいない）テーマを選ばざるをえないからである。

こうして、おしつけられたにせよ自ら選んだにせよ、研究そのもののうちに好奇心や創造性など自己の欲求を満たす過程をもたないままに、より高次の目的へと行為を手段化していく。つまり、研究活動は論文となってはじめて意味をもち、論文は業績あるいは地位として結実しなければ意味がない。このように、現在をむしばみながら先へ先へと逃れてゆく意義＝目的を、ぬかりなく達成しつづける限りにおいては、むなしさを感じることもないだろう。しかし、そうして手にした論文や地位とは、彼が全過程において犠牲にしてきたさまざまな欲求の代償でもある。その論文が無価値になることや彼が地位を失うことは、現実的な不利益だけでなく、過去の行為を意義づけその空虚を埋めていた唯一の支えを失うことにもなるのだ。もはや業績や地位が、かけがえのない彼自身の一部（あるいは全部）になってしまう。ものと化してしまった自己は、くりにかえし意義づけられ、評価されつづけなければ安定しえない故に、限りなく拡大再生産を要求

する。

ところが、現実には、空虚さをおおいつくす成功を重ねることはほとんど不可能である。研究上の失敗、あるいは求めるような地位が得られないこともあれば、ただ何となく意欲が喪失したり、体が不調をうったえたりすることもある。これらを契機として、どれだけ自己の空虚さに気づきうるかは、その人の感受性と想像力にかかっている。このご折を単に敗北として受けとめるだけでは意味がない。さらに目もあてられないのは、このご折を努力の不足であるときめつけて、ますます行為を空疎化し、自己疎外を深めていく場合である。

自らが生きてきた過程の空虚さを自覚することは、かなりの精神的苦痛をともなう作業であるにちがいない。だからこそ、できるかぎりそこから目をそらせようとするのであろう。しかし目をそらせるということは、空虚さが存在することに気づいているということに他ならず、逃げつづける限りにおいて、それにおびやかされ支配されつづけられなければならない。

しかしながら、自らの過去の空虚さを自覚したとしても、決してすべての問題が解決されるわけではないのである。この現実的世界の中で、さまざまなやむをえない制約をこうむって生きていかなければならない以上、いかなる現在を生きようともそれは完全であることはできないし、したがってどれだけ自覚をもって生きたにせよ過去にくやみは残るであろう。

ただしその悔恨は、自らの選択した現在を、生ききろうとして生ききれなかった部分として現に生きることのできた生の充実を照らし出しこそすれ、決して打ち消すものではないはずである。

次に、家族および恋人とおしの人間関係について分析してみよう。ここでも、望ましい形での関係ではなしに、先の研究者集団で描かれた、近代的な集合体に対置する形で、前近代的の共同体として描くことにする。

近代的集合体が、個を確立した人間が各自の利益のために合理的にむすびつけられた集団であるとすれば、この共同体は個人が自立する以前の自他が未分化な状態にある集団と言えるだろう。前者の構成員を広い意味でのエゴイストとするなら、後者の人間はやはり広い意味でナルシストと呼べるかもしれない。両者とも自分にしか関心がないという点で共通しているが、エゴイストは現実を客観的に判断できるから、より大きな利益の獲得や損失の回避のために相手を尊重しうるので、ナルシストは対象を主観によってゆがめてしか認識できないから、相手と一体感をもち得る限りにおいて献身するが、その献身も自己中心的であり、その幻想がやぶれると限りなく残酷になったりする。

男は仕事、女は家事にしか能のない半分人間とおしてやっとな一人前、という家族が多いらしい。それに子供がとり込まれて、一見ゆるぎないマイホーム集団ができあがる。しかし、そこでは愛という甘い言葉でつくろわれて、互いに期待をおしつけあい、しばりあう。よい子とは、親

の期待を内在化し、自らの期待として従順に実現する子供のことで、よい妻、よい夫も同様である。互いに依存し支配しあって、見せかけの安定を保っている。

しかしある年齢に達すると、子供は親の期待と自己の欲求との矛盾に気付かざるをえない。これが自立への第一歩なのであるが、そこで安易に支配と依存の対象を異性へと求めることがままある。そして相手も同様の欲求を持っていたら、互いに親としてかつ子供として、あまえ合うという関係が成立してしまう。そのような関係においては、他者との出合いや、自分の気付くことと違った自己との出合いは、得られることがない。むしろそれらは除外され、ひたすら相手のうちに自己を投影して、それ以外は見まいとする。自分の及ばない世界を相手を持っていることは恐怖であり、自分と相手とがぴったりと一致して矛盾をきたさないことが理想となる。この理想的状態を継続させることは、いかなるギマンをもってしてもほとんど不可能であろう。このような自他の同一化において達成される安定は、利害の力関係による安定に比べて、強い安定感を得られるかもしれないが、実際はきわめて不安定なものである。

以上のように、2とおりの集団について対照的に描いてきたわけであるが、実際に見られる集団のありようは、両方の属性をおびている。

たとえば研究室集団において、たんなる研究上のつながりだけでなく、家族的、サークル的つながりによって団結が高められたりする。(研究室ぐるみの懇親旅行、コンパ、そろいのトレーナーを着る、など。)このことも、考えようによっては、冷酷な利害関係の実状をカモフラージュするためのものにすぎないのかもしれない。しかし構成員にとって、集団の中で自らの役割を果たすことで得られる安心感は、大きな意味を持っているにちがいない。この帰属意識のもたらす安心感のゆえに、個人の利益をこえた集団への奉仕が、特に立場の不利な学生などに見られることが多い(これも、集団の利益を経て自分の利益に結びつけるという計算にもとづくものとも考えられようが、現実にはその試みは計算ミスに終ること必定である。)

また、逆に家族や恋人どおしにあっても、各個人がどれだけ利己的な意図によって(これもまた愛という言葉につくろわれて)利用しあい、あざむきあっていることである。

以上において、近代合理主義につらぬかれたエゴイストとその集団、および自我の確立が不完全なナルシストとその集団をそれぞれ分析し、それらの折中として現実の集団をとらえようとした。近代は前近代をのりこえる限りにおいて価値があったように、エゴイズムもナルシズムをこえる限りにおいて意味があるのかもしれない。世間で批難される利己主義者とは、多分にナルシズムを含んだエゴイストであって、明析なエゴイストほど長い目でみた自己の利益のために、他人を尊重する術を心得ているものである。

しかし、エゴイストとして完璧であるほど、より自己完結的に、自己の絶対化と人生の空疎化を深める結果ともなる。エゴイストになりきることへのぞ折が、エゴイズムを超える一つの契機となりうるのではないだろうか。

同様に、明晰な現実主義者は、現象を客観的には握し、正確に判断する能力のゆえに落ち入りやすい欠点をもつ。たとえば、他人に働きかけるときに、その人間が何によって動かされるか（金か名誉かそれとも人間愛か）を正確に判断し、それにもとづいて実践し、望みどおりの結果を得たとしよう。このような現実認識 — その実証の連鎖によって、彼の人間に対する理解は深まっていくが、その理解とは彼の目的（たとえば他人を自分の思うように動かすこと）に照らし出された限りのものでしかありえない。（それでも面白いで、とくに相手がエライ人の場合はな — 会長）その人間が全く別の次元で、全くちがった生き方をしていようと、自己完結的な明晰さにとどまる者にとっては、知りつくされた陳腐な人間としか映らない。（もちろんその人間がある面において、彼の理解したとおりの人間であったらうし、さらに首尾一貫してケチであったり俗物であったりすることも、まれではないけれど。）

近代合理主義は、能力によって人間を差別し、効率によってあらゆる行為を価値づける。それは、管理という目的によって照らし出された限りでの合理主義である。（これ以外の目的にはきわめて非合理という他ない。）それは、管理される者を限りなく疎外するだけでなく、管理する者をも不安と精神の貧困におとし入れている。

「あの向こうに見える麦ばたけはどうだね。おれは、パンなんか食やしない。麦なんてなんにもなりやしない。…………… だけど、あんたのその金色の髪は美しいなあ。あんたがおれと仲よくしてくれたら、おれにや、そいつが、すばらしいものに見えるだろう。金色の麦を見ると、あんたを思い出すだろうな。それに麦を吹く風の音も、おれにやうれしいだろうな……………」

「だれかが、なん百万もの星のどれかに咲いている、たった一輪の花がすきだったら、その人は、そのたくさんの星をながめるだけで、しあわせになれる人だ。」

サン＝テグジュペリ

花のおいを吸ったことがない、星をながめたことがない、だれも愛したことがない大人たちには、宇宙が二乗されるこの豊かさはわからない。この豊かさを糧とするとき、人間は幸福に生きていくのに多くを必要としない。しかし、大人たちは、「パオパブとおなじように、自分を御大層なものと思っているから」、そんなにわずかなもので足りるとは思いたくない。彼らは数字しか知らないのだから余計である。

塚崎幹夫

<< 結 >>

我々はあまりにも容易に、他人や事物を理解したつもりになってはいないだろうか。酒を飲

みグチを言いあっただけで、甘い言葉をかわしあっただけで、分類し命名しただけで、専門家の意見を聞いただけで、すべては既知のものとして片づけられる。これらの行為は、実のところ単に安心したいがためのものでしかないように思える。

彼にとって、他者の理解とは敵か味方かの区別にすぎず（それが大事なんやで、まちごうたら殺されるもんね 一会長）、事物の理解とは利用できるかできないかを知ることでしかない。相手に対して本当に関心を持っているわけではないのだから、理解のための手続きはなるべく簡単に明白なものがよい。地位・財産・論文の数から容ぼう・スタイルまで、表面的俗物的な価値基準がもてはやされる。中身を味わうことなくカラばかりあさりつつける、まさに砂をかむような味気ない生き方ではなかるうか（そういえば、ショウジョウバエの脱け殻を何千となく集めて分析しただけという卒業研究があったね 一会長）。

サン＝テグジュペリの王子さまは、変な大人たち（寄せ算に熱中する者、酒を飲む自分のみじめさを忘れるために酒を飲む者、数分おきに街燈をつけたり消したりする仕事にかかりきりの点燈夫、自分の誓ったことがまちがいになることをおそれて絶対にかわりそうもないおよそつまらないことだけに関心をもつ学者、などなど）につぎつぎとあいそをつかし、やっと出合ったキツネに大事なことを教わる。ほんとうのことは目では見えないこと。仲よくなるには時間と根気がいること。仲よくなった相手には責任をはたさなければならないこと。そして別れぎわに、泣き出そうとするキツネに、王子さまが何もいいことがないじゃないかと言うと、キツネは答える。「いや、ある。麦ばたけの色が、あるからね」と。

時間をかけて、骨をおって、そうしてつながりが深められるにしたがって、自己の限られた世界が別な世界へと開かれていく。

ほんとうの充実や幸福が、今ある自己をのりこえ、より広い世界へと開かれてゆく過程にあるとするならば、現在を未来のための手段とし他者を自己のための手段とする合理主義者は、成功しつづける限り充実とも幸福とも無縁な存在であるしかない。なぜなら、彼らの尊重する効率や利益や秩序の世界は、あらかじめ他の世界を排除し自己完結することによって成り立つものであるのだから。

最後に今日の社会状況を見渡せば、あらゆる面で近代合理主義に破たんがおとづれつつあるようだ。我々がかかえこんでしまった空虚さは、それを埋めるためにもっと多くの物質、もっと新しい幻想を求めつつけている。高度成長から低成長、そしてマイナス成長へと後退を余儀なくされている先進国の経済状況は、もはやそれに答えるすべを失ってしまったようだ。このざ折を機に、我々が何を求め何を行ってきたかを根底から問いなおし、近代をこえる新たな選択をなしうるであろうか。支配層は、着々とファシズムへの準備を進めている。

参 考 ・ 引 用 文 献

- 真木 介 「人間解放の理論のために」 他  
見田宗介 「現代日本の心情と論理」 他  
竹内芳郎 「サルトル哲学序説」  
三木 清 「人生論ノート」  
サン＝テグジュペリ 「星の王子さま」 内藤 訳  
塚崎幹夫 「星の王子さまの世界」  
E. フロム 「自由からの逃走」 他  
中島みゆき 「愛が好きです」

## 西アフリカ、ダカール大学訪問記

細見 彬文

私がダカールに行こうと思ったのは、1974年の7月である。そのころ西アフリカは干ばつに見舞われ、マリ共和国を中心として西アフリカ全域で多くの死者が出ているという時期であった。食糧問題に最も強い関心をいざしく自分は、その現実を一度見るべきだと思ったと同時に、このあたりの海岸のムラサキイガイの採集や、またダカール大学を中心に出版されている生物学の文献を手に入れたと思ったわけである。しかし、結果から言えば、これらは一つも満たされぬまま日本へ帰ったわけであるが、ダカールでは多くのことを学び、また、この旅は満足させられるものであった。

西アフリカに行くのは、一度パリに出なければならぬ。大阪発のパリ行に乗りこんだ。飛行機代を少しでも安くするため、私はパリ行の団体客の一員となった。フライト・オンリーという制度を利用すると、料金が非常に安くなるのを利用した。これは、通常の団体客だとホテル代、食事代が組み込まれているが、飛行機代だけだと通常の旅費の4割程度になるためである。私の席の隣となりは若い娘さんであった。一人は大阪から、一人は神戸から来たと言っていた。

飛行機は朝方、アンカレッジに着いた。アンカレッジの空港からのながめは、まことに何もない、ただ広々とした荒野の中にただ空港だけがポツリとあるような所だと思った。日本人客相手に店があって、日本語を話す白人娘がアラスカ名物を売っていた。

再び機上の人となる。ラジオをならしている者がいたので、ステュワテスに、機内でラジオをならすと危険だから注意するように注文をつけたところ、この飛行機は大丈夫だと言っていた。ところが、私が英語を話すことができるのを知って、ステュワテスが、日本語放送を機内でやってくれるようにたのみにきた。なんのことはない、タバコの販売をやっているの日本人の皆さんに買いに来てほしい、というだけの内容だった。私は機内で寝ることができないたちである。いつまでたっても目を開けたままである。これは、実は飛行機がこわいので、寝ることができないのである。飛行機はジャンボ機なので私の席からは風景が見えなかったから、席を立てて後部

へ行き、一つの窓を独占して外の風景を楽しんだ。＜起きていても助かるわけでもあるまいに 会長＞ 飛行機はカナダ北部の小さな島々の上を飛んでいた。下には氷でガチガチに凍った島々が見え、まわりに厚い氷が一面にはりついているきびしい風景を見た。そうした風景が見えかくれするうち、飛行機はグリーンランドの上空にさしかかった。グリーンランドの風景はなんともすばらしく美しかった。そそり立つ山々、谷をうめつくす氷河が、ゆけどもゆけども色をかえ形をかえて現われる。低い太陽に照らされて、氷河の上に山は長い影をおとしている。あまりの美しさに、私はカメラのシャッターを何枚も切っていた。しかし、私以外に、このグリーンランドの風景を楽しんでいる人はいなかった。そんなわけで、朝食を私だけが忘れてしまっていた。ステュワートに朝食を注文すると、一人だけ席にいなかったのはあなたなのね、と注意された。

着いたのは、パリのドゴール空港であった。ここは税関も非常に簡単であった。すいと通してくれた。空港に立ち飲みのコーヒ一屋があったので、知っている唯一のフランス語で、カフエ・オ・レイと言うと、店のおやじが、大か小かと聞きかしたように思ったが、なにもわからないから、またカフエ・オ・レイと言うと、大きなコップにミルクコーヒーを入れてくれた。

パリでの宿泊は、テルミヌス・サンサラールという名のホテルで、旅行社が予約してくれた五つ星のホテルであった。五つ星であるだけに部屋はすばらしくよかった。このホテルの前に海産物の料理店があった。おもてでは、カキやムラサキイガイを積みあげて売っていた。また、おもてのカキやイガイを店で注文して料理してもらうことも可能だった。一度イガイの味をたしかめようと思ってイガイをたのんだら、ウェイターは、生身を殻を開いただけのものだがいいか、と言うので、生身では食べる気がおきなかったから、サケのクンセイを注文した。これはなかなかうまかった。パリでは食事を楽しんだ。また夕食には、ホテルの近くの細い路ぞいにある店へ入ってみた。メニューを見たが何のことかわからない。迷っているとウェイターが、これはどうか、と言うので、ウイ、ウイ、と言うと、持ってこられた料理は細かく切ったキャベツを油でいためたものをどっさり下じきにして、太いソーセージをやいたもので、これもなかなかおいしかった。

パリの地図を持って、パリの街の散歩にも出かけた。セーヌの河岸を歩いた。大阪の中之島のあたりに似ているな、と思った。しかし、建物はすばらしく手のこんだものばかりで、歴史の古さを感じさせた。ルーブル美術館の横を歩きながら、それを有名なルーブルとも知らずに歩いてきた。私は、ルーブル美術館からエッフェル塔のあたりまで歩いた。ときどき、道ばたの外に机といすを並べた喫茶店に立ちよった。

ホテルのロビーでものうけに座っていると、日本人の若い娘が来て私に話しかけた。彼女はホテルの隣りのお店に勤めているのだが、私の店に来てみないかというさそいであった。ホテルの隣りにほんの小ぼけな店があり、女物の小間物店であった。ところが、私が店に入るなり、フ

ランス娘がいきなり「サヨナラ」と言ったのでびっくりしたが、「コンニチワ」というのを間違えたのであった。日本娘が「変なこと言わないで」とフランス娘に注意していた。奥さんに何か買ってあげませんか、と言うものだから、香水を買った。シャネルであった。

パリに来たのだから、モンマルトルの丘にも行ってみたいと思い、タクシーを走らせた。日本では、ここに有名画家が集まっているような話を聞いていたものだから行ってみたいのだが、ならべてある絵はかけ出しの画家の二束三文の絵ばかりであった。画家は、こじき画家と呼んでいるような連中ばかりであった。カメラを向けてあちこち撮っていると、「勝手に写真とったらアカンデー」という関西弁が聞こえた。若い日本人であった。彼は自分の画をならべてある所へ私を連れていき、一枚買えと言った。どこから来ているのだと聞くと、西宮から来ていると言った。一枚5000円でどうだ、と言った。下手くそな絵を一枚5000円はひどいと思ったが、同じ兵庫県のよしみで一枚買った。下手な絵だった。

ダカール行きの飛行機は、ドゴール空港から出発することになっていた。空港に少し早い目に行き、飛行機を待った。ところが、放送があって2時間ほど待たされた。しびれを切らせているところに、また放送があった。フランス語の放送だから意味がわからない。ところが、まわりに居た黒人たちがこぶしをふり上げて、ひどくふんがいていた。どうもまだ待たされるのだなと思った。3時間近く待った。飛行機を待つ間に空港のトイレに行った。手洗場で黒人が短い髪を一所懸命にといていた。私は、あんな短い髪の毛をといてどうなるものだろうと、不思議に思った。手洗場を見ると、センマイのような形をした髪の毛が落ちていた。黒人の髪は、センマイのようなラセン状なのだということを、初めて知った。

5時間以上も待って、やっと飛行機が出ることになった。飛行機は、エールフランスの飛行機である。飛行機がとび立ってしばらくすると、黒人が帰国できるうれしさからか、多勢が立ち歩くので、どうも不愉快であった。飛行機はしばらくすると、ピレネー山脈を越えた。山々の頂に雪があるのを見た。夜になり、それからいやになるほど長い時間を飛んだ。トイレに立ったとき、ステュワデスたちが妙なことをしているのを見た。後部ドアのすき間にトイレの紙をつめていたのである。実はここから空気がぬけているのであった。私も手伝ってやったが、立派なジェット機としてはなんともおそまつな代物だった。エールフランスは、アフリカ行きなんぞにはポロ機しかまわさないのかもしれない。

ともかく、いやになるほど長い時間飛んで、ダカールに着いた。ダカール空港は、ひどくおそまつな施設であった。セネガルの係官は、ひどく荒っぽい感じを与える連中で、なにか悪いことをして取り調べられているような感じを受けた。しかし、税関検査はしごく簡単であった。ポーターの少年が外から入り込んで、人の荷物を勝手に手にとり、係官に「いいだろう」と言ってタクシーまで運ぶものだから、係官は中を開いて見もしないのであった。少年は、当然のごとく

がら、私に金を要求した。しかし私は、セネガルのお金は持っていないし、フランスの小銭を持っていただけだったので、小銭を渡すと、もっともっとと要求したが、私はないと言って断った。タクシーで、クロイド・スード（南十字星）というホテルに向った。

クロイド・スードはセネガル一番のホテルである。空港の近くにあるのだが、タクシーはものの5分ほど走って5ドルを要求した。ホテルでは中二階になったひどく大きい部屋を与えられた。私一人しか泊らないのに、ベッドが3つも用意されていた。そして壁は真白で、どこかの病院にでも放りこまれたような感じてあった。ホテルの従業員はたいてい接客態度が悪く、なにかいつもしかられているような感じを持たされた。トラベラーステックを換金するときでも、いちいち住所まで審かされた上、50ドル1枚しか換金できないと言って、それ以上は換えてくれなかった。ホテルのバーに行っても、ボーイたちはむっつりして不愛相だった。ボーイ長はボーイ達に、軍隊式に命令していた。ホテル代が高い上にサービスの悪いこのホテルは、2泊しただけで別のホテルにかかわることにした。ダカールの中心にあるインデペンデンス街のビシーホテルにかわった。このホテルの前には奇妙な物売りがいて、タクシーを降りると待ちかまえていて金塊のようなものをさし出し、これは金だ、20ドルで買え、とつきまとった。その20ドルが、10ドルでどうだ、5ドルでどうだ、最後に3ドルまで値下げした。えらく安い金塊があるものである。私はビシーホテルへ逃げ込んだ。ビシーホテルは接客態度もよく、ホテル代も安く、一応安心してきるところであった。

ホテルにおちついたあと、ダカール大学の動物学教室を訪ねた。動物学教室の主任教授は、シセ氏であった。シセ教授は私を歓迎してくれた。教授は私を標本室へ連れていき、イガイ関係の標本も見せてくれた。ミドリイガイであった。私が標本がほしいと言うと、標本商人がいるからそこへ連れて行ってやろうと言って、ダカールの町はずれの小さな集落へつれていき、標本商人に会わせてくれた。標本屋はさまざまな貝を集めていて、どれにもひどく高い値がついていた。おそらく、アメリカ人のコレクター相手の店なのだろうと思った。シセ教授は私を、自分の家にまねいてくれた。家に行く途中でマンゴーとビールを買い込んだ。シセ教授宅で、簡単な食事が出た。シセ教授宅はかなり広いコンクリート住宅であった。私の家の2倍くらいのはらばらさがあり、冷蔵庫もあった。しかし、家の中はがらんとしており、ごちゃごちゃといろんな物がある私の家と比べると、簡素であった。セネガルビールが強かったせいで、私は食事をすませたらねむってしまっていた。これは大変失礼なことをしてしまったと思った。シセ教授の生活を見ると、セネガルの中産階級は自動車も持っているし、冷蔵庫もある。この点では、日本の中産階級とそれほど開きはないと思う。しかし、セネガルではその中産階級はきわめて少ないものと思われた。

シセ教授が、自分の助手がトカゲをとりにいくから、一踏に行かないかと言ったので、トカゲとりに同行することになった。トカゲとりのランドローバーは朝の出発だった。ダカール大学

から同乗させてもらった。助手2人と私の3名だった。自動車がベルデ川から大陸に入るとそこは土だけの世界だった。砂ばくとはいこう いうものかとはじめて知った。自動車は海岸から数キロメートル内陸部を南へ向って進んだ。そのうち、バオバブという木の生えている場所に出た。バオバブの木は、日本の盆さいを大きくしたような奇妙な形をしていた。バオバブの木はサバンナ状にボツリボツリと生えている。その下でピーナッツなどの農業がいとなまれているようだった。しかし、畑といってもどこからどこまでがさかい目なのかははっきりしない畑であった。こうしたバオバブの木のサバンナは、30 km 以上も続いた。この間に人に会うことは全然なかった。

M<sup>o</sup>Boul という町について、昼食にすることにした。助手2人は私をフランス人経営のレストランに案内しておいて、別の食堂に食事に行った。私の入ったレストランはがらんとしていて、だれも客はいなかった。驚いたことに、机の上にはハエがびっしりと敷物を敷きつめたように止っていた。食事をする気がなくなり、パンとコーヒーだけを注文した。コーヒーカップにはハエが50匹も止った。

ランドローバーのラジオの調子がおかしいので、助手が困っていたから、助手の一人に私のラジオを進呈した。日本では2000円の安物ではあったが、日本のラジオは優秀であった。トカゲを探るために、M<sup>o</sup>Bour の近くの農家から一人の男を道案内に乗せた。主道からそれて2 km ほど行ったところに、トカゲのいる林があった。それは日本では見たこともない、絵にかいたような林であった。サルスベリによく似た木がまばらに生えており、その中を、クジャクを小さくしたような鳥がとびかっていた。下草はほとんど生えていない林であった。助手たちは、大きなバオバブの木の下でトカゲをさがしていた。私がふと木の皮の落ちているのに気づいてそれを持ち上げると、その下から体長40 cm もあるトカゲが出てきた。2人を大声で呼んだ。助手達は、このトカゲは毒がないと言っていた。農夫がつかみ上げたのを見ると、腹にしま模様のあるすばらしいトカゲであった。あとは、トカゲの餌となるヤステを採集した。ヤステは15 cm もある大きなもので、サルスベリによく似た木の幹のあちこちにとまっていた。ヤステ採りをしていたとき、運転をしていた助手が、自分にもラジオをくれないかと言ってきた。私はすぐ OK と言い、そのかわり Fadiouth まで行ってくれないかときいた。ガソリン代を出せば行くと言うのでラジオを渡す約束をした。

車が南へ向かうほど緑が多くなってくることがわかった。セネガルという国は、砂ばくと熱帯雨林の間にある国であるという感じを持った。助手達は私を、Joal という町まで連れて行ってくれた。面白いことに、Fadiouthというのは Joal のすぐ南にある小さな島であった。Joal から Fadiouth まで長い木の橋がかかっていた。ものすごく長い橋で、500 m くらいあった。それは、ここが河口であったためである。橋の上から見渡すと、Joal 側は広大なマングローブの森であった。森は数キロメートル内陸部まで及んでいた。Fadiouth側の東の方には、川の中にかくさ

んの高床式の家が建っていた。助手達に、あれは家かと聞いたら、コウリャンを保存する小屋だと言っていた。面白い風景だった。

Padilouth は不思議な島で、島の土地はすべて貝殻でできていた。土はまったくない。オニアサリに似た貝殻ばかりでできていた。数十軒の家があった。家の壁は、土に貝殻をまぜてぬりかためたものだった。小供達が大笑いてコウリャンつきをやっていた。これは子供達の仕事になっているようである。カメラを向けると子供達の中の一人がはげしく拒否した。写真を撮ることはできなかった。Padilouth から丸木舟を出してもらって、マングローブの林や高床式の小屋の見学をすることにした。マングローブ林の下部にはカキが多くついていた。工夫すれば、このあたりはカキの養殖ができるようになるだろうと思った。潮の干いた泥地には、シオマネキが多くいた。このような見学を終えて、その日のうちにダカールまで帰った。

セネガルでは、自分の研究に関して得ることはなにもなかった。研究上のメリットを得るのは、発展途上国では無理だということがわかった。これはインドでも同じことであった。研究のことはあきらめて、いろいろ見学することにした。

西アフリカは干ばつで、牛がつきつぎに死に、人も難民となって都市部に集まっているということが、日本の新聞にはよく出ていた。しかし、ダカールにいる限りでは、そのような事情はわからなかった。シセ教授にもそのことを聞いたが、奥地のことだと言って、詳細な説明はしてもらえなかった。しかし、ホテルで知り合ったマリ共和国のバマコから来たという少年は、マリではガオ地区が干ばつで、人が一人もいなくなったと言っていた。ダカールの街には、乞食は少なかった。私は、その国の良し悪しは、乞食の数を1つの目安と考えている。ダカールの街はインドのボンベイやカルカッタと比べれば、乞食はほんとに少なかった。そして、皆なにか小さな仕事をみつけて、その日その日の銭をかせいでいた。ホテルの前にはいつも4~5人の青年がいたが、自動車の車体ふきとかクツみがきとかをやっていた。

そうした青年の中にまじって、ホテル前でクツみがきをやっていた一人の少年がいた。彼は、私がホテルを出るときと入るときは決まって、クツをみがかせるとせがむのであった。だから、私は1日に2回もクツをみがくことがつづいた。クツみがきは1回50フランである。日本円にして50円である。ときには彼は、今日は朝食を食べていないので、クツをみがかせてくれとせがんだ。この少年と私の間に、少しづつ友情が生まれてきた。私は、手紙の投かん、タクシーの呼びとめ、食料品の買いつけ、それから京大の森下正明先生に言いつけられていたアリの採集などを、この少年に頼んでやってもらった。そのつど50フランほど支払った。こうした仕事は収入が増えるので、彼にとっては喜ばしいものであったろうし、私にとっては便利であった。そこで、私はこの少年の収入が増えるようにするため、他の客からもそうした小さな仕事を与えられるように、看板をつくってやることにした。幸い日本から厚手のボール紙やビニール袋をもって

来ていたので、ボール紙にマジックペンで「小さな仕事を引き受けます」と書いた英語の看板をつくった。少年は大変喜んでいて。でも、それで彼の収入が増えたかどうか、私は知ることができなかった。

独立広場近くに大きな本屋が一軒あった。この本屋は、神戸でいえば中規模程度であるが、セネガルで一番大きな本屋である。並べてある本は、ほとんどがフランスで印刷製本された本であって、セネガル独自の本は数少なかった。自然科学関係の本はほとんどなかった。だから、本そのものにはほとんど興味はわかかなかった。ところが、この本屋には美しいセネガル娘が売り子として働いていた。私は、このセネガル娘を口説いてやろうと決心した。ところが彼女は、英語は全くだめでフランス語しか話せなかった。私の英語と彼女のフランス語では、なかなか意志が伝わらない。筆談までしてやっとのことで、ビシーホテルに5時に来るという約束をとりつけた。私は、セネガル娘と食事をしながら楽しい話でもしようと、期待に胸ふくらませて彼女を待った。ところが、いつまで待っても彼女は現われなかった。完全にふられたわけである。どこの国でもかたい娘はかたいものであることを知らされた。

外国で日本大使館に行ってお世話になるのを、私はあまり好まない。それは、私が精神的には無国籍者であるせいである。私は日本という国がきらいなのである。ところが、セネガルではそれが許されなかった。まず第一に、ダカール大学を訪ねることだけでも、日本大使館の紹介が必要であった。他の公的機関に行くにも必要であった。だから私は、仕方なく2度、3度と日本大使館におもむいた。大使館はホテルから歩いて10分ほどの、とあるビルの3階にあった。全部で三部屋ほどの小さな大使館であった。日本大使館のすぐ隣が、南ベトナム解放戦線臨時政府の大使館であった。日本大使館とほぼ同じくらしい大使館であった。大使館は、セネガルでの日本の地位を象徴していた。

日本大使館に臨時職員として一人の日本女性が勤めていた。彼女はモスクワ大学で知り合ったマリの青年と結婚して、はるばるダカールまでやってきていたのである。彼女の夫は、ダカール大学の新聞学科に身をおく学生であった。彼女は私を気に入ってくれ、自分の家に食事に来ないかとさそってくれた。私は好意をすなおに受け、彼女の住む大学の学生寮をたずねた。彼女の夫も、私を歓迎してくれた。そまつな食事が出たが、彼女がせいっぱいつくってくれた食事であった。しかし不思議であった。彼女はなぜこんな地球の辺地<地球は丸いと思っていたが、“辺地”があったのかね 一會長>の青年と結婚する気になったのか。<日本ぎらいの精神的無国籍者が、そんなことわからんでは困るね> 二人の間には2人の子供さんがいた。私が彼女の家族の中に入ると、言葉が大変であった。彼女と夫はロシア語で話をする。私と彼は英語で、彼女と私は日本語で、そして彼女が子供達と話をするときはセネガル語であった。

私は、インテリである彼女の夫に対し、いろいろな質問をぶつけてみた。私は、「セネガルが最も望んでいるものは何か」と聞いた。彼は即座に、「それは水と食糧だ」と答えた。また私は「日本は、その水と食糧をあなたの国に援助しているのか」と聞いた。答は「否」であった。「最もその要求にこたえている国はどこか」と聞くと、「それは中国だ」という答がかえってきた。中国は、セネガル、モーリタニア、マリの三国国境のセネガル河でダムを作っていた。技術も人間も資金も中国の援助で、ダムがつくられていることを聞かされた。だからこの国では中国人が最も尊敬されていることも聞かされた。

ダカールの街で、人民服を着た中国人に会った。むこうは、幹部らしい人を中心に4人でこちらに向かって歩いてきた。そして、私の顔を見て、けけんそうな顔付で近づいてきて、私にどこから来たのかと、幹部らしい人が聞いた。私はポケットから手帳を出し、日本人生物学者と書いて渡したら、にこにこしながら握手してくれた。またこんなこともあった。ダカール大学の近くを歩いていると、朝鮮民主主義人民共和国の大使館があった。三階建の立派なビル全体が、大使館であった。日本からみると北朝鮮は小国である。だが、このセネガルという国での位置はどうか。日本の小さな大使館と比べて、北朝鮮は日本以上に重要な地位を占めていることを、はだて感せずにはおられなかった。私は、日本大使館に行ったとき、一人の領事に「日本はこの国に対しなにを援助していますか」と聞いてみた。領事いわく、「それは柔道です。」領事自ら、「それ以外の援助ができていないので残念です」ともらしていた。中国はダムを作って、この国の水問題を解決しようととりくんでいる。ところが、日本の援助が柔道教授だけというのはなさけなかった。

ダカールにいて一つ興味深いことがあったのは、電話帳である。厚さ3 cm ばかりの電話帳に、西アフリカ9ヶ国の電話がすべて記載してある。西はセネガルから東はナイジェリアまでの9ヶ国の電話全部合わせても、厚さ3 cm ばかりにしかない。しかも活字が大きい。なんともんびりした国々だと思った。

ダカール大学には私の望む文献も標本もないことがわかったので、なるべく早くここを出発して、フランスのマルセーユの臨海実験所に行くことに決めた。ところで、シセ教授が言うにはモーリタニアのノークショットまで行けばイガイの類が多いというので、ノークショット入りを計画した。ピサをとりモーリタニア大使館まで出向いた。大使が、たった25才ばかりの青年だったのには驚いた。しかし、日本大使館の紹介状がないとピサを出すことはできないと言う。かなり入国が難しい国らしい。標本採集だけでノークショットに行くには、航空券も変えねばならないし、モーリタニア行きはあきらめた。

ダカールを出発する前に、お世話になったシセ教授にお礼がしたかったので、ダカールの最

高級のレストランに教授を招いた。そしてメニューを見せ、好きなものを選んで下さいと言った。ところが教授は、パンと水だけでよいと言う。このレストランでは、スープからはじめて5品くらい選ばないといけないから、と言っても、パンと水しかいない、と言いはる。私は仕方なく自分用にスープやエスカルゴを注文して、教授はパンと水だけを注文した。教授は私にこう言った。「あなたは、この国の人達がうえに苦しんでいることを知っていますか。私はよく知っているので、パンと水だけでよいのです」と。私はあらためて教授をみなおした。ダカール大学にはこんな立派な教授がいるのである。この旅行の最大の収穫は、この教授と接したことであったと思う。私は次の日、マルセーユの臨海実験所に向けて出発した。

## (一)

若者の目で現代のアメリカを見てみよう。若者とアメリカ西海岸、このころ生協をはじめいろんな所で、アメリカ旅行のポスターが目につく。私の大学時代は、アメリカ＝帝国主義と相場が決まっていたものだ。それが、私の周囲でも、若い人でアメリカへ行きたいという人が多くなった。あの当時、アメリカへ行きたい、などと言ったら、非国民(?)とおこられたような気がする。それなら、現代のアメリカは帝国主義でなくなったのだろうか。アメリカが帝国主義でなかったらどこが帝国主義の国だというのか。もしそうではないという人がいるなら、この「生物学会誌」に反論を書いてもらおう。アメリカは、世界のあらゆる所で、いまだに悪の種をまき散らせておるのではないか。「アメリカだって、悪い人ばかりではない」当り前の話である。世界中どこへ行っても、いい人はいる。そんな単純な動機で行くのなら、日本の山谷あたりでがまんしておいた方がいい。ただし、きょう日は汚ないがこうで行くと凶暴なガキが(浮浪者狩り)と称して殺しにくるらしいし、また同じ日本人でも助けてくれないという危険を覚悟で行かなければならないが。知らない所へ若いうちに行っているんな体験をしたい。「カッコイイ事をメカスな」これも、台湾、韓国、東南アジアへの売春ツアーと大差はない。要するに白人に対する劣等感に基づくものであり、学者になりたい者ならアメリカへ行ってつまらんハクをつけてくる(軽ハク)か、そうでなければ日本にいてももてない男(女)が、アメリカでも行けばもてるのではないか(私もそう思っているのだが)、という助平根性である。よく考えれば、日本でもてない奴がアメリカでもてるはずがない。西海岸で短足をさらけだしては、衰れさをさそうだけである。それでも向うはちゃんと計算づくて、うまくおだてて金を使わせ、帰りに向うのダラな自然保護団体の「捕鯨反対」と書いたチャラチャラしたシャツまで買わせ、うれしそうな顔をして帰ってくるのである。だいたい旅行なぞというものはその土地に対する独断と偏見を助長しに行くようなもので、遠くであれこれ思っているところがよいのである。先のないお年寄りならメイ土の土産話に行くのも結構であるが(あの世とやらは、どんな人種がまじっているかわからないから)。その程度の事なのだから、行くのならこっそり行って、帰ってからあまりアメリカへ行っ

できた、と他人にしゃべらん方がいい。「お前は、それだけ悪口いうところをみると、本当はよほど英語ができなかったのだろう」その通り、中学へ行って英語を習ったとき、毎日「私の名前は……、これは……、あれは……」まったくくだらんかった。アメリカ（イギリスだったかも）の中学生の書いた手紙、「私の名前は……、オカンの名前は……、オトウの名前は……、朝起きて顔を洗って学校へ……」ああ、こんなのになら、日本は戦争に負けたのか、死んだ英霊も浮かばれまい、とガッカリしたものだ。それでも、受験のために英語の勉強もした。それが大学へ入ったら、周りの人は皆、アメリカは帝国主義だという。私の家は由緒正しき神職だったので、子供のころから言われていた、「悪人達の使っている言葉を真似してはいけませんよ」と。故に、英語がますますできなくなった（みんな親のせい）。それでも、向うの音楽はよく聴いたし映画はよく見た。これは英語ができないことが幸いした。だいたい歌の文句など、日本でもアメリカでもロクなものはないようだ。特にアメリカのように愛だの恋だのと、やたらという人種の言葉の意味がわかったら、私のように歯の悪い人間は、1本残らず浮いてしまうにちがいない。映画にしたところで、ちょうどものごとのよくわかっていない中、高校時代に、西部劇などで白人がインディアンをやっつけるのを見て興奮していたが、何のことはない、本当は白人が勝手にインディアンの土地に入りこんできただけのことだった。それでも、インディアンの中にもジエロニモなどという勇敢なのがいたそうで、その子孫になら会いに行きたい気もする。でも止めておこう。会いに行ったら、近代的なビルの中の土産物店で、金歯をきらつかせながら色のあせた絵ハガキを売っていた、なんて目に会いそうだ。

以上、くどくどと書いたから、もうだれもアメリカへ行く気はしなくなったでしょう。もうすでに切符を買ってしまった人は、私にゆずりなさい。私は助平根性で行ってきますから。

それでも行く、という人に対しては、大平洋の真中で飛行機が墜落することを祈ることにしよう。

## (二)

“あなたのリードで島田もゆれる チークダンスのやるせなさ 乱れるすその……”

毎日雪の中に閉じこめられていたのだととうとう幻覚症状が現われたか、と心配してくださる向きもあろうが、もしそうであっても、別に他人様に善を与えることはないと思うから、御心配にはおよばない。毎日家の周りの除雪という単純労働をやっていると、ついこの歌が出てくるのである。大学2年生のころだったと思うが、授業料（あの当時半年で3~4千円）を使い込み、合計から「すぐ払え、できなければ家に知らせる」とおどかされ、すぐパチンコ屋へ走り、結局だめだったので、アルバイトセンターの紹介である繊維関係の会社へ10日間ほどアルバイトに

行ったときのことである。仕事といったら、毎日クソ暑いのにバカ重たい布地を35～6才のオッチャンといっしょに倉庫から出し入れするという、まあ頭を使わなくてもすむという点では私にぴったりの仕事であった。この35～6才のオッチャンが仕事の間中、この歌を唱うのである。その会社には若い女の子がたくさんいて、みんなそのオッチャンの歌をきいて、「アー、中年はいややねえ」という。「バカ、十年以上もこんな仕事やったら、アホな歌でも唄わんとやっておれん。」このオッチャン、後で聞いたところによると、高校を出てすぐこの会社に勤めたその当時は、まったく無口な少年だったらしい。それがある日突然、どこかが狂ってきて、歌は唄うは、若い女の子の尻は追いかけるは、となったらし。そして私は、「あんたもマネしたらあかんで」と言われた。ところがである。私の方はもう3日目ぐらいて、このオッチャンと2人で「あなたのリードで……」という詞子になって、「クソ暑いのに、まじめくさった顔でやれるかいな」。そして若い女の子から、「あんたの将来も決まったようなもんね」（女の直感とは恐ろしいものである。今の私を見抜いていたのだから）。

こうしていまごろ、雷の中で単純な仕事をやっていると、この歌が出てくるのである。いやらしい中年が定着したのか、それとも労働者らしくなったのか、喜んでいいのか、それとも悲しむべきことなのか。

ところで、その当時の思い出がもうひとつある。ちょうど大学紛争のころだったが、友人の結婚式を見て、あの歌の文句にある高島田を私が、「あれはなかなかいいものだ」と言ったら、「あれは島田女郎衆が男に買われていく時のかっこうで、それがいいという男は許せない」と、たいそうしかられた事を思い出す。このごろでは、そんなことを言う女性もいないようだ。喜んでいいのか、それとも悲しむべきことなのか。

### (三)

よく近所の中学生や高校生に、自分達が習っている数学や英語がいったい卒業した後何の役に立つのか、と聞かれる。これはだいたい、できない奴の常とう句のようなものだが、不思議と生物学が何の役に立つのか、という奴はあまりいないようだ。まあ、ガキ共の本心がどこにあるかは一応別として、数学では、お金のかんじょうさえできれば、あまりエライ人にならないかぎり、事足りそうである。ところが、生物学については、何が卒業後の実社会で必要なのか（別に統一した体系など望んでいるわけではないが）、私が最低必要だと思っている（感じている）事と、今の学校で習っている事との間が、あまりにもかけ離れているように思えてならない。

私の所へ魚を買いに来た人が、「この魚、殺すにはどうしたらいいのですか」と聞く。「頭をたたけば死にますよ」と言うと、まるで殺人鬼でも見るような目つきで私を見て、「そんなか

わいそうなこと、できますか」という。「それなら、水を切っておけばしばらくして死にますよ」と教えると、「そんなことで死ぬんですか」と不思議そうな顔をする。いちいち説明するのも面倒臭いので、「いいかげんに持って行って、煮るなり焼くなりしてくれ」という気持ちになる。大人が大人なら、子供も子供である。水櫃の中のイワナを見て、「これイワナでない。だって凶産とちがう。」私が「イワナだ」といっても信じない。山奥の魚屋のオッサンの言葉より、凶産の……先生の方が信用できるらしい。それに、釣った事（捕った事）もないらしいくせに、「イワナというのは、深山幽谷、人跡未踏の地にしかおらず、大きなヘビを食って生きている」などはずかしくもなく、私の前で言っているガキもいる。魚だけに限った事ではない。山なので、よく学校から野鳥観察に来る。私らの子供のころとちがって、驚かすこともなく、追っかける事もなく、捕えることもない。悪いことは全くしないで、遠くから双眼鏡でながめているだけである。あんな事をしていて何が面白いのだろうか、と思う。私は狩猟民族の血をひいているらしく、野蛮人と思われていないらしい。自然保護を訴えている人から、魚を食べに来たゴイサギをつかまえて死なせた事を、きつくしかられた。「鳥がかわいそうと思わないのか」と。イワナや、それを苦勞して育てているしよほくれ中年男の方は、ちっともかわいそうではないらしい。現実にある（起こっている）自然（生物）に対する認識・対応の仕方が、私に言わせれば、全くアカンのである。このごろは、中学生でもDNAや、ダーウインの進化論を知っているという事だ。（はずかしながら、私はよく知らない。）だが、そんな高尚な事を知ってる彼らが、生まれてこの方、生物と接し又それを食料としてきた過程で、それらをどんな関連性の中で興味をもち理解してきたのか、私は疑問に思っている。社会に出てから必要な生物学とは何かなどという、またいろいろややこしい問題が出てきそうだから、それはさておいて、どうしても必要なのは、個々の人間（教える側も教わる側も）が生活の場でいかに生物とかかわっているか、そこから出てきて、そこから生まれた個々の人の哲学で語られるものではないだろうか。それを抜きにして考えるから、ゆがんだ自然保護論になったり、単に業績を上げるためだけの論文づくりの生物学になったり、進学するための生物学になったりするのだろう。個々の人間にとって、食べ物としての生物、仲間としての生物、観念としてではなく現実に存在するものとしての生物を、しっかりと自分の目でとらえ、自分の言葉で、なぜ殺すのか、なぜ保護するのか、だれのための生物（自然）であるべきか、を考える。これこそ生物学の第1歩だと、私は考えるのだが。

#### (四)

「日本、アメリカ、イギリス等先進国の放射性廃棄物の海洋投棄が後進国の反対で……」ある日の新聞の記事である。このごろ先進国のやることは、まずロクな事ではないようだ。日本

もまた、全くはずかしい事を行っている。そのはずかしい記事の横に、コンピュータによる明かるい日本の未来像なるものもいっしょに載っていた。以前、オシメだけをしたハダカの子供が一人で家において、その子供の前に大きなコンピュータが置いてあり、子供がそのボタンを押すだけで家中のありとあらゆることができる、というマンガが載っていた事を、フト思い出した。

いや、それよりももっと変なマンガを思い浮かべてしまった。それは、子供ではなく大の大人がやはりコンピュータの前にすわり、あらゆることをボタン一つで処理し、またそれが可能だというマンガである。ところが、テメエの出したクソだけは処理できなくて、クソまみれになりながら、平気でコンピュータの前にすわっていた。

下品で貧弱な想像だとヒンシュクするなかれ、これこそ公害に汚染された経済大国日本の姿そのものではないか。コンピュータなるものがそんなにすばらしいものだったら、放射性廃棄物を海中に捨てるのが良い事なのか悪い事なのか、いっぺんコンピュータにかけてみればよい。そんな簡単な事すらできない機械なら、こんなものこそ海中へ捨ててしまった方がよからう。そうすれば電力の節約になり、廃棄物も減るにちがいない。

それとも、コンピュータが危険だといっても、もうだれも信じなくなっているのだろうか。それこそ危険な状況だから、やはり何とか捨てなければならぬようだ。

※※※※

※※※※

今回は、婚前旅行と称してアメリカへ行った T 子さんへ、同級生の中でいちばん出世しいつも私の近境を心配して下さる Y 君へ、優秀な論文を書いて卒業していく生物学科の学生へ、そして、反原発運動を終えてあこがれのコンピュータ会社へ就職することになった H 君へ、それぞれの御期待にそえるよう下品に書いてみました。

<< 書評とおほしきもの >>.

「地震・憲兵・火事・巡査」 (山崎 今朝弥 著、岩波文庫)

栗 間 修 平

私は現在、日本生物学会に所属している。そして何年か前に、何人かの人間をよせ集めて日本生物学会東京支部を設立し、自らその支部長に就任した。それ以後、日本生物学会の名を天下にとどろかすべく、日夜紛骨碎身努力を重ねている。私が現在所属している学会は、日本生物学会ただひとつである。

私が本来専門的に勉強したことになっているものは、生物学ではなく、法律学である。だから、法律関係の学会にも一つくらい名前をつらねていてもよさそうだけど、そういうものには近づかないことにしている。というのも、法律関係の学会でわが生物学会ほど面白そうなものは無いだろうと思うからである。それに、私は法律学を勉強したということになっているのであって、実際にはあまり法律学など勉強していない。不勉強な私を簡単に受け入れてくれる法律関係の学会が、この世に存在するかどうかもわからない。生物学であれば、私は思い出したように発行される「日本生物学会誌」に目を通すことによって、多少は勉強しているつもりである。

あまり勉強しなくても、「勉強したことになっている」というのは、どういうことか？ それは、私が“法学士”という称号を一応いただいているからである。この称号は、その筋のいわゆる“権威”あるところからもらったものだけれど、戦前には勝手に「法律学士」の称号を認許したり、「法律博士」の称号を授けたりした人がいた。それが、これから紹介する本の著者である山崎今朝弥という人物である。

山崎今朝弥という人物は、明治・大正・昭和を生きた弁護士であり、社会主義者であった。この男は、私の直感によれば、わが日本生物学会の奥野会長とよく似ている。どういう所が似ているか、後で書こう。以前、奥野会長と話した時、会長が「定年退官後は司法試験に挑戦して、弁護士になろうと思うてるんや」といったようなことを話されたような記憶がある。会長が弁護士になるとしたら、恐らく山崎今朝弥のような感じの弁護士になるのではなからうか、またなっ  
てほしい、と私は思っている。しかし、司法試験というのはことのほか難しいものである。実は私も以前、司法試験を受けようと思って3日間ほど勉強したことがある。私が大学を出て最初に

就職した時、同期で入社した者の中に司法試験の勉強をしている男がいた。その男と私はお互いに「仕事をする気がない」という点で気が合った。ある時、その男が「どうせお前もマジメに仕事する気などないやろ。どうや、一緒に司法試験の勉強をしないか」と私を誘った。その男が言うには、「民法を制する者、司法試験を制す」で、とにかく民法をバッチリ勉強する必要があるとのことである。かくして私の司法試験への挑戦が開始された。そして3日間ほど法律書をひもとき、条文に線を引いたりした。しかし、面白くもなければ、読んで感動を覚えることなど決してない法律書や条文をながめていると、それだけで疲れてくる。そんな生活が何年も続くことを想像すると、早々にギブ・アップした方がいいと私は判断した。かくして、私の弁護士への夢はついで去った。私が思うに、司法試験の勉強というのは、よほどのヤマッ気とよほどの根気を必要とする。パチンコの必勝法はガンバリとネバリであり、私はパチンコに対してその力を十分発揮できるガンバリとネバリを持っているけど、司法試験に対するヤマッ気と根気はそれほど持ちあわせていなかった。

前置きの部分で脱線ばかりしては申し訳ない。そろそろ本題に入ろう。「地震・憲兵・火事・巡査」は、山崎今朝弥が関東大震災直後ころまでに書いた文を集めたもので、昨年12月岩波文庫から出た。本書のタイトルは「地震・雷・火事・オヤジ」のもじりである。山崎は、関東大震災のどさくさの中で憲兵に虐殺された大杉栄や、亀戸警察署で虐殺された平沢計七等と親交があった。その山崎が権力への怒りをこめて使った言葉が、この「地震・憲兵・火事・巡査」である。無論、関東大震災の時に虐殺されたのは、大杉や平沢等の“主義者”ばかりではない。多数の朝鮮人が日本人の手にかかって虐殺されている。そのことにも山崎は言及している。

さて、“主義者”にして弁護士である山崎とはどういう人物か？ まずは、本書所収の自伝に即して紹介しよう。

君、性は山崎、名は今朝弥、明治十年逆賊西郷隆盛の兵を西南に挙ぐるや、君これに応じて直ちに信州諏訪に生る。明科を距たるにわずか八里、実には清和源氏第百八代の孫なり。幼にして既に神童、餓鬼大将より腕白太政大臣に累進し、大いに世にはばからる。

ここに出てくる“明科”というのは、大逆事件の宮下太吉が爆裂弾をつくったとされている所である。この大逆事件には、山崎もすんでのところまでひっかけられそうになるけど、幸いにシッポをつかまれずにすむ。それは彼が“主義者”になってからの話である。さて、その腕白太政大臣は成長し、苦学して、判検事任用試験と弁護士試験に合格する。そして一度官吏になるけど体質にあわなかったようで30日ほどで辞めている。その後渡米し、そこで幸徳秋水等と交わり“主義者”となっていく。アメリカで何をしてたか？ 自伝によれば、次のようになっている。

久しく海外に遊び、ペースメント・ユニバシチーを出て、欧米各国色々博士に任じ、特に特に米国伯爵を授けらる。誠に希代の豪傑たり。

アメリカに“ペースメント・ユニバシチー”という大学があるかといえば、そういうものは存在しない。要するに、サラ洗いをして勉強しな という意味である。“欧米各国色々博士”に任じたのも山崎が勝手に自分で任じたことである。“米国伯爵”もアメリカに貴族制度が無いことに目をつけた山崎が勝手に名乗りをあげたものである。

山崎は“米国伯爵”の肩書きを引っさげて明治40年に帰国する。そして弁護士を開業する。当時は弁護士も広告を出すことが許されていた。彼が東京で出した広告は次のようになっている。

### 公 事 訴 訟 は 弁 護 士 の 喰 物

東京米国大使館前

弁 護 士

米 博 士

山 崎 今 朝 弥

電話 赤局 800番

弁 護 士 頼 む な 公 事 す る な

当時は電話の少ない時代である。ここで使われている電話番号は、少し離れた所にある肉屋の電話番号である。それを山崎は勝手に使っている。ここで山崎は道楽雑誌である「法律文学」を出すが、借金をかかえて、上諏訪へ逃げる。その後、甲府に弁護士事務所を開く。その時に出した広告は次のようになっている。

売出し

に付き

弁 護 士 大 安 売

甲府法務局長  
平民法律所長

山 崎 今 朝 弥

甲府遊かく大門前 化物屋敷

面白いのは、自分の事務所を“法務局”と称していることである。山崎は自分の事務所の玄関に“法務局”の看板をかけている。このころ大逆事件にひっかけられそうになるけど、すんでのところまで難を免れる。

その後再び上京し、組合東京法律事務所を開く。1913年のことである。これは日本で最

初の合同法律事務所である。しかし山崎はここを3年余りで追出される。それというのも、山崎が所かまわず放ししたり、更に事務所で裸になったりするからである。それに加えて、当局のお尋ね者であるような“主義者”たちが山崎を尋ねてひんぱんに出入りするため、他の紳士弁護士からひんしゆくをかったのである。

1913年に山崎は組合東京法律事務所をつくったが、同じ年に山崎は日本社会党を結成して、その総裁に就任している。党員は山崎ただ1人だったという。その党の党則を全文次に掲げる。

第一条 名称を日本社会党とす。

第二条 目的は憲政を促進し普通選挙の実行を期するにあり。

第三条 以上

これは、当局に結社届を出した組織であるけど、当局からは解散も禁止もされず、要するに相手にされなかった。ところが山崎は、日本社会党総裁の名でもって、原敬・加藤高明・犬養毅等に総裁会議の召集状まで送っている。もちろんこれも相手にされなかった。

組合東京法律事務所を去った山崎は、1917年ロシア革命の年に、平民法律事務所をつくる。甲府時代にも、山崎は平民法律所長の肩書きを使用したことがあるが、今回はそのより本格的な取組みであった。山崎が今回開いた平民法律所は同時に“平民大学”であり、雑誌「平民法律」の出版元でもあった。「平民法律」及び平民法律所の広告は次のようなものである。

---

無料専門、我がまま御免、道楽半分にて社会問題に関係ある  
法律事件のみを取り扱う。

本誌の種になる事件は特に歓迎する。

東京市芝区新桜田町十九番地

平民大 平民法律事務所  
学直営

さて“平民大学”とは何か？これが先に書いた「法律学士」や「法律博士」の称号を勝手に出していた所である。山崎の書いた「平民大学令」をそのまま全文引用しよう。

平民大学令

第一条 平民法律所は総てこれを平民大学と称す。

第二条 日常の實際生活に必要な法律は総てこれを平民法律と称す。

第三条 雑誌「平民法律」はこれを平民大学法律講義と称す。

- 第四条 平民大学は毎月一回、平民大学法律講義を発行公布して、平民法律を学者に伝授す。
- 第五条 平民大学法律講義は、通俗平凡にして、趣味津津たるものとす。
- 第六条 日本臣民は均しく、平民大学学者となる権利を有す。
- 第七条 本学の卒学者には、平民大学法律学士」の称号を認許す。
- 第八条 本学または国家に特別の功勞ありたるものは、総てこれを本学名誉員に推薦し、ことごとくこれに「平民大学法律博士」の称号を授く。但し、平民の体面を汚したるときは、即時これをち奪す。
- 第九条 本学学者は、卒学までの学費六カ月分金壹円なりを前納するものとす。
- 第十条 本学学者は、本学講義に対し、無料解答を要求する特権を有す。但し返信料はこれを要す。
- 第十一条 一般臣民は別段の手續を要せず、年半円を前納し「平民法律」を愛読することを得。

平民大学学長山崎今朝弥は、この「大学令」にあわせて「平民大学令詳解」も書いている。そこで「平民法律」を次のように定義している。普通、法律というものは「財産や地位の現状を乱さぬように、財産や地位のある人たちがこしらえたものである。しかし平民法律は、現状を打破し、局面を展開し、財産や地位を得んとする、現在財産や地位なき人の、日常生活に最も必要なる法律のことである。」また、「大学令」に出てくる“学者”とは「平民法律を学ぶ者」である。

まだまだ面白い話は沢山ある。例えば、平民大学夏期講習を開催し、警察の干渉を受けたことに対し、三田警察所長を相手に名誉回復請求訴訟をおこしたり、科料金五円を言渡されたことに対して、それを不服として正式裁判を請求してみたり……。しかし、それは割愛しておこう。

私は、山崎と奥野会長に似ている所がある、と感じた。どこらへんがそうか、皆さんもわかったのではないだろうか？ 奥野会長が山崎同様に所かまわず放屁したりするかどうかは、私は知らない。だから、「その点が似てる」と私は言っているのではないことだけは、奥野会長にしかられないように、ここに附言しておく。（言わなくても思っているにちがいない。弁解するところがいよいよ怪しい。“名誉回復請求訴訟”をおこすぞ。一 会長）

1923年9月1日、関東大震災がおこる。倒壊した建物の下敷きになったり、火に焼かれて多くの人々が命を失った。ところが、関東大震災における死者は、これだけではすまなかった。震災直後に発生した流言ヒ語によって、多数の朝鮮人が虐殺され、そして山崎とも親交のあった大杉栄等の“主義者”も虐殺された。大杉と一緒に橋宗一という少年も殺されている。本書の後半は、この大虐殺に対して、山崎の怒りをぶちまけた文章が集めてある。私が引用するより、皆さんに直接読んでいただいた方が、“怒り”がよくわかると思う。ただ、一つつけ加えておきた

いのは、山崎が朝鮮民族の独立ということをはっきり言っている点である。このことは、当時としては相当に勇気のいることだったはずである。勇気があるばかりでなく、当時の日本人の多くはもちろん“主義者”の多くですら、朝鮮人を日本人とは対等に考えず、一つの民族として尊重する思想を欠いていた。そんな中での山崎の考えは立派だと私は思う。

さて、本書には山崎の震災直後の時期までの文章が納められている。朝鮮人虐殺、仲間であり友人である人たちの虐殺に怒りをぶちまけた山崎は、その後どう生きていったか？ 彼は、相変わらずどこまでマジメでどこまで不真面目かわからぬ態度をとりながら、戦時中も権力にシッポをつかまれぬように、生き抜いた。そして日本労農弁護団の一せい検挙に対する弁護人を引きうけたりしている。獄中非転向・不屈の闘士というイメージからは、山崎はほど遠いけど、その彼も節を通した一人だと私は思う。“ほとんどマジメ”でとに角がんばるというタイプの人を、私は自分がそうでないだけに、立派だとは思う。 かし、ある近より難さを感じる。それに対し、山崎のような感じの人には、非常に親近感を覚える。山崎は戦後も、三鷹事件や松川事件等の弁護人を引きうけ、1954年78才で鬼籍の人となった。「地獄のさたも金次第」というところをみると、残念ながらあの世にも平民がいたり、ブルジョワがいたりするかもしれない。山崎はそこでまた“天国伯爵”を自称してみたり、“亡者平民大学”をつくったりしているのかもしれない。

課題研究発表会の事後報告として

(ただし発表内容については言及なし)

田 中 敏 之

最もそれはそんな肩を張って話すほどのことでもないでしょう。そして何も他の学科がやっているからというだけのことでもない。卒業後の各自の進路はいろいろであり、大学に残るものもいれば社会復帰するものもいる。そんなとき、4年生としての一年間自分が興味をもってやってきた課題研究の発表する場があってもいいんところがうかなと思っただけのことです。何について興味をもち、どういうふうにやってどう思ったかを発表してみて、いろいろ人から意見をきいてもいいと思う。ただそれだけのことだったのかも知れない。

さて、発表会をしようという話をはじめてもち出したのは去年の年末、正直な話このへんるときにはものすごくかまえていきこんでいた。だけでもそんな話をするときにいるのはいつも数人だけで十分に話し合えなかったし、それは年が明けてからもそうであった。(これには多分自分がなまけていたからだったとも思う。)年が明けてからは何よりもあせった。だけでももう一度4年生各自に賛否をとってみてと思っていた。もっともここで賛否をとっていても始まらないのであると後で気がついた。すべて決定的なことはやるならやる、やらないならば何もしない、とこの2通りのことしか実際不必要だったのです。できることなら、卒業生全員の意志でこの会を開催できればよかったのと思いますが、なんせ気まぐれのくせがある筆者はやると断言したわけであります。やると決めてからでも何度もやめようと思いましたが、これまた筆者のひねくれ根性によって独断と偏見のみによって会を開催いたしました。だけでも発表して下さった先輩や同輩の御苦勞なきには会の開催はなかったように思います。またお忙しい中を我々のつたない発表に耳を傾けて下さった先生方・先輩また熱心にきいておられた後輩にも会の開催を企画したものの一人として紙面を借りててありますが感謝の意を表します。

会の成功・不成功は全く関係ないこととして考えて、これらの会がもてたということに多少なり意義をみいだしています。反省点は多くあります。参加者(これは特に発表者)が少なかったこと。これはひとえに主催者のうちのひとりである筆者の責任です。任務をおこたって十分に話し合える時間がもてなかったこと。そして話し方のまずさで誤解されるように話したので参加者が少なかったのでしょう。まったくこれには頭が下がる次第です。また各自のもち時間が十分でなかったこと。これもまたあまり時間的余裕がないように会の日時を決めたのも原因の一つではないかと考えます。その他もろもろ。反省点が多く目立ったのではありますが、なんとか無事

に終了しました。くり返しになりますが参加して下さいの方々、また発表をきいて下さった方々に感謝の意を表し紙面ではありますがお礼の言葉にかえさせていただきます。

!!! だれだ、「原稿は無審査・無修正の上無責任に掲載する」なんて「投稿規定」をつくったヤツは! — 会長 — !!!

### 生物学誇大事典

「とり」：羽毛を持つせきつい動物をトリという。したがって、羽毛を持たぬ動物はトリとはいわない。生まれたての赤裸のトリの子はヒナといい、羽毛をむしられたニワトリをカシワという。さて、トリの本質は、その上昇志向にある。それは、今を去る1億5千万年前、恐龍の全盛時代であるジュラ紀に生じた。何としてでも上昇したいと熟望した、まだトリになっていないトリの先祖のは虫類は、たまたま羽毛というすばらしい出世の道具を得て、ますますその思いをつのらせた。とはいえ、羽毛だけでは上昇できない。彼は、骨を中空にし、体中に気のうという空どうをみだし、尻尾を切り捨て、体を軽くすることに努めた。そして最後に、脳まで節約してしまったのである。その結果、トリは空高くまい上ることができた。しかし、そのさえずりは今にいたるまで全く無内容である、そして現在、地上は上昇志向など持たない、もっとかしこいほ乳類が占有し、ときに落ちてきたトリをバックリやったりしている。

!?! 会計報告 !?!

1982年4月 - 1983年3月

収 入

1000円会員	24人分	2400円
1000円会員	97人分	97000円
2000円会員	6人分	12000円
小計		111400円
前年度くりこし		32810円
総 計		144210円

支 出

上質紙	8000枚×2円	16000円
表紙	1000枚×3円	3000円
ファクス原紙	40枚×70円	2800円
印刷インキ	2本×900円	1800円
送 料	13・14号その他	59000円
計		82500円
くりこし		61700円

監査報告

監査対象である帳簿・領収書その他一切存在せず、さりとて会長の頭の中まで調べるわけにもいかず、結局監査はできなかったが、おおむね良好であると認む。

日本生物学会会計監査 夢籍 忍太郎 印

<< 編集局だより >>

- ◎ この4月、当学会編集局長は悪運強く就職に成功し、地方に去りました。当人の強っての希望で、本誌の今年の表紙はピンク色です。これは、何でも本人のバラ色の未来を象徴しているのだそうです。私には、ピンク色にしか見えませんがね。
- ◎ ところで、彼は、地方へ出ても編集局長は続けると断固として主張し、説得に耳も貸しません。そして、完成間近かの第15号の編集後記をすぐ書いて送ると約束しました。ところがなかなか来ません。まあ、新任の職場で大変なのだろうと、さいそくもひかえていたのですが、聞くところによると、最近知り合ったある女性のところへは、ひんぴんと手紙が来ていたとのことで、ここにいたって編集局長を解任することにしました。当分、会長自ら編集局を独裁支配することにします。
- ◎ 口コミで伝わるのか、毎年何人か入会の申し込みが来ます。ところが、寄る年波でこのところめっきり物覚えが悪くなり、入会手続き、といってもカードに記入してバックナンバーを送るだけなのですが、それを忘れてしまうことがあります。申し込んでも来ないときは、お手数ですが再度催足して下さい。
- ◎ 先日、一市民の方から本部へ電話がありました。「会員は非教授に限ると書いてあるが、ふつうの労働者はいれないのですか」「いえいえ、非教授というのは教授以外ということで教授でさえなければ、全国民がはいれます」「それならそのように、もっとはっきり書いてもらわんと困る」この会をつくったとき、ちょうど金沢大学の生物学科は、教授が教室会議を解散して独裁をはじめ、我々は果敢にもそれに対してトウソウしてたものですから、あのような呼びかけとなったわけです。もっとも、実は今もなお教授独裁中で、我々はなおトウソウ（字が変わったかも知れませんが）中です。
- ◎ 例によって、会長にも真疑のほどは定かでない「会計報告」とともに、フリカ工用紙を同封します。「会計報告」によれば結構黒字が出ていますから、皆さん、あまり気になさらないで下さい。

1983年4月20日 会長

## 「日本生物学会」 設立趣意書

なんにも目的はないけれど、「日本生物学会」なるものをつくらうと思う。動物学会や植物学会はあるが、日本にはまだ、生物学会と称するものはない。しいていえば、それが設立の動機である。

会の目的はないが、事業はおこなう。

その一つは、会誌の発行である。これを「日本生物学会誌」と名づける。刊行は不定期とし、原稿が集まり次第発行する。したがって、原稿が集まらなければ、永久に発行しない。内容は、会の名称にふさわしいものとする。ただし、“生物”には当然人間も含まれる。たとえ天文学でも、もしそれを人間がやったのならよいことになる。また、“日本”生物学会であるので、日本語以外は受けつけない。受けつけた原稿は、無審査・無修正のうえ、無責任に掲載する。

第二の事業は、「大会」である。年一回金沢において開く。大会は、しゃべりたいものがしゃべり、聞きたいものが聞くことによって成立する。したがって、しゃべりたいものがいなければ直ちに解散する。(聞きたいものがいなくても同様である) 二次会はさまたげない。

会員の資格は“非教授”とする。要するに、教授以外であればだれでもよい。もっとも、教授以上の社会的地位の方は、おことわりすることがある。

会員の義務は、会費をおさめること、及び、会費の行方について、深く追及しないことである。会費は当分の間、定職についているもの年1000円、定職なきもの年100円とする。善意の寄付はこれをこぼさない。ただし寄付しても、何の特典も与えない。

会の“管理・運営”は、当分の間、会長の独裁とする。会員は会長に対し、団交権を持つ。したがって、総会は開かない。団交は文書でおこなってもよい。

本部は、金沢市丸の内1の1 金沢大学理学部生物学教室 生態学第一研究室 におく。連絡はすべて本部あてにおこなうこと。

各地に支部を設立することが望ましい。支部長は自称すれば直ちに発効する。支部の管理運営は支部長の独裁とし、本部は一切関知しない。

以上の趣旨に賛同の方は(あまりいるとは思わないが)、あるいは賛同しなくとも、同封のカードに氏名・住所・電話番号をかき、会費を同封して、本部まで送りたい。会誌の発送をもって受領書にかえる。原稿がなければ永久に出ないことを御了承のほどを。

1977年5月26日の佳き日に

会 長 奥野良之助

## < 会 則 追 記 >

教授もしくはこれと同等の社会的地位にある者で、どうしても入会を希望するものは、“不名誉会員”とし、会費2000円を徴収する。

学部長、学長もしくはこれに同等な社会的地位を有する者で、何としても入会したい人は、“特別不名誉会員”とし、会費4000円を徴収する。

現普通会員も、出世したときは、これらに準ずる。

会費の送金は、郵便局の下記振替口座を利用するのが、最も安上り（1回15円）である。もちろん切手でもよく、100円を書留にして350円かけて送ってもらっても、当方是一向に差支えない。

金沢 40763 日本生物学会

## 日 本 生 物 学 会 誌 投 稿 規 定

- 1 日本語に限る。
- 2 漢字はなるべく当用漢字に限ること。タイプの括字がない時は、勝手にカナにかえることがある。
- 3 原稿の長さの制限はしない。ただし、1号は100枚（400字づめ）しかはいらないので、適宜分割掲載することがある。
- 4 形式・内容とも、全く自由とする。読む・読まないは読者の自由であるから、読者のことなど考えずに書けばよい。
- 5 匿名、変名、ペンネーム、いずれも可。もちろん本名でもよい。
- 6 いずれの場合も、肩書、所属などは不要。
- 7 寄稿者には本誌5部を進呈する。別刷のほしい方は、原稿にその旨誌しておくこと。
- 8 図、写真も可。ただし写真はおそらく、何が何かわからなくなるものになる。

1982年8月 改訂

（1977年7月の第1号35ページ  
記載の投稿規定は、廃棄処分とする）

日本生物学会誌 第15号 1933年4月25日

編集・発行 日本生物学会

金沢市丸の内1丁目

金沢大学理学部生物学教室

生態学第1研究室内

編集無責任者 奥野良之助

許可無断転載